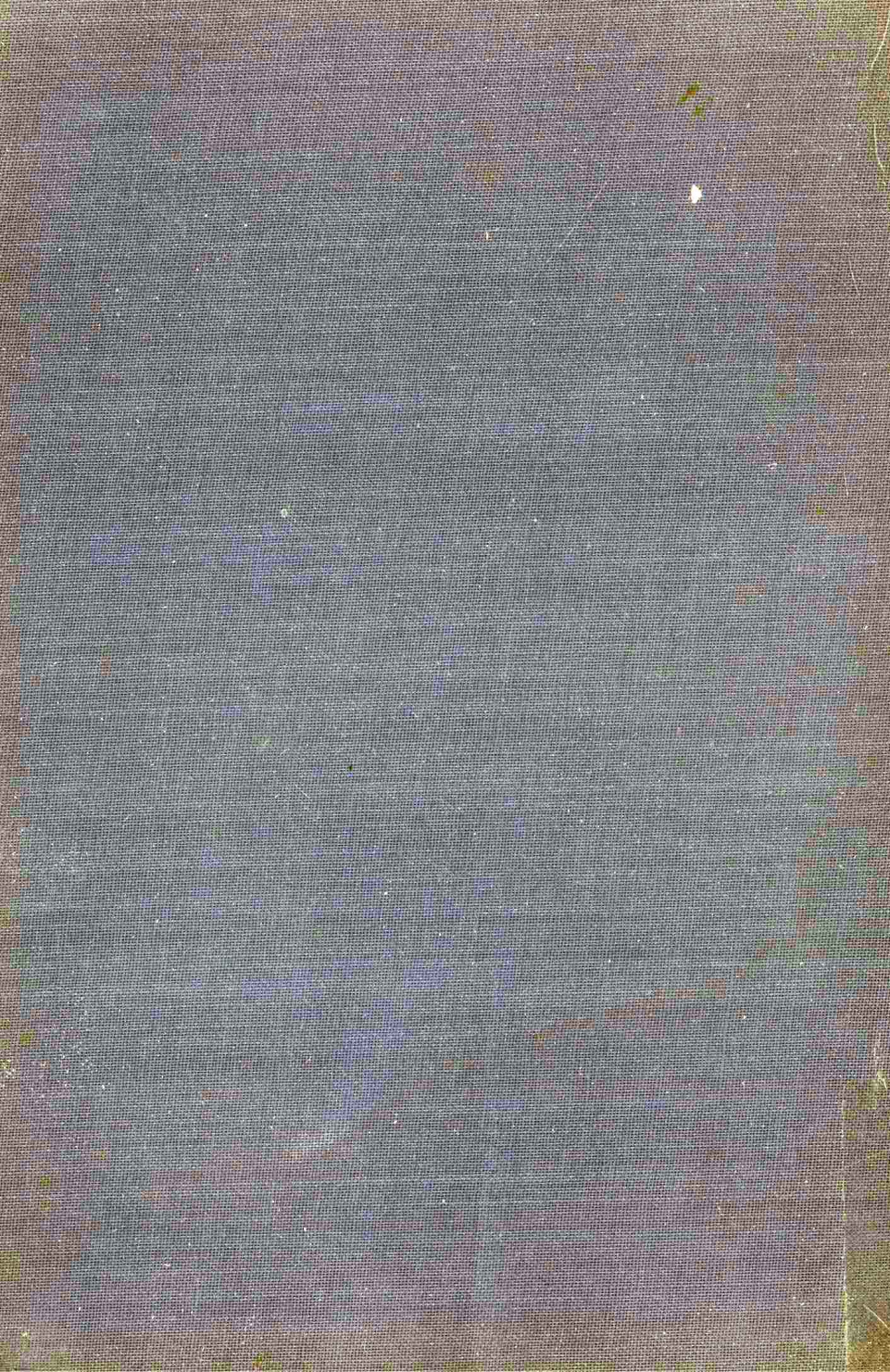
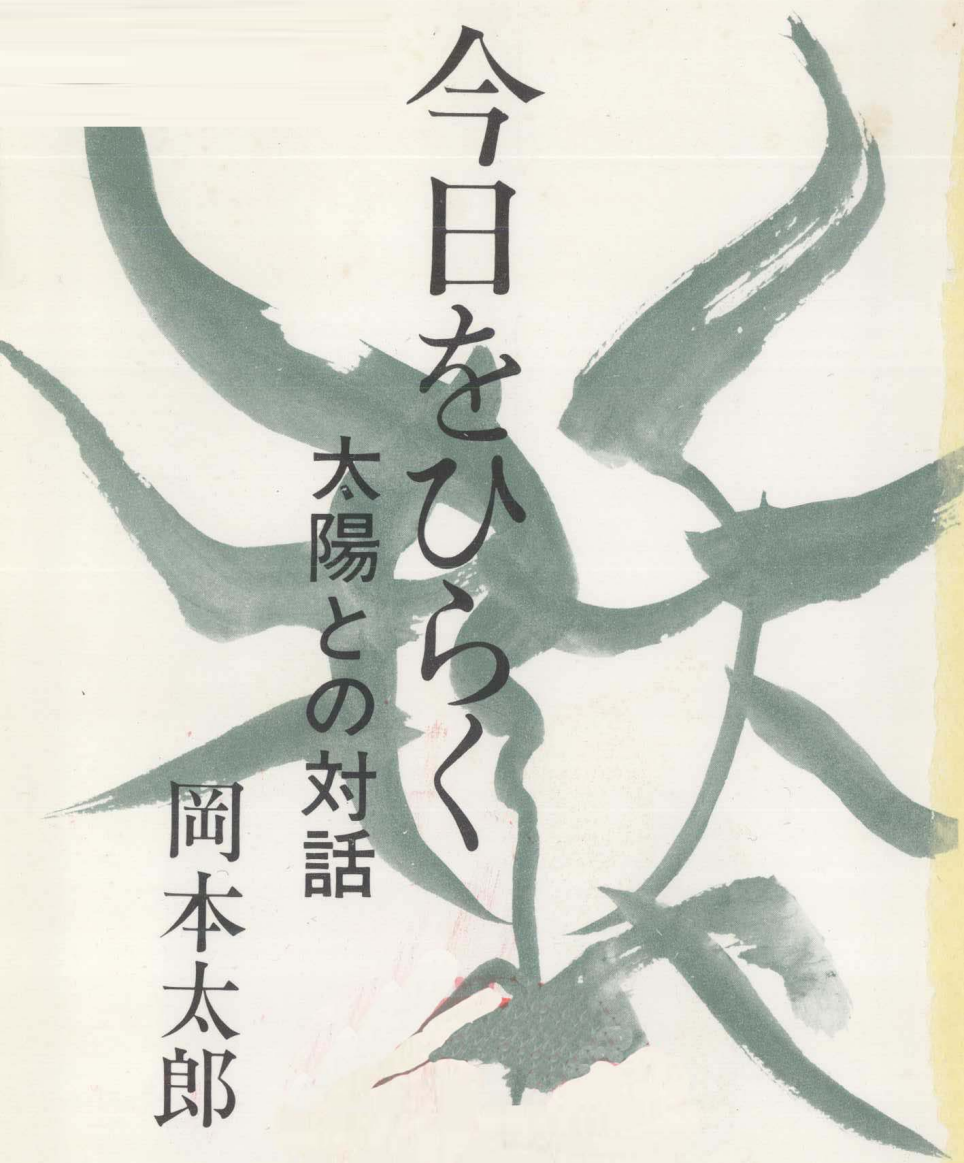




今日をひらく

太陽との対話

岡本太郎



今日をひらく 太陽との対話 NDC704 19.4cm 定価四五〇円

昭和四十二年三月二十四日 第一刷発行
昭和四十二年六月六日 第三刷発行

著 者 岡 本 太 郎

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株 式 講 談 社

東京都文京区音羽二の十二の二十一
電話東京九四二一一(大代表)
振替口座東京 三九三〇

印 刷 所 多 田 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 藤 沢 製 本 株 式 会 社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。 © TARO OKAMOTO 1967 PRINTED IN JAPAN

一匹の蟻……序にかえて

青春時代——十余年のバリ生活の終わりに、私の到達した結論は絶望的だった。

この宇宙のなかで、私の存在は一匹の蟻ありにすぎない。

だが、この蟻が傷ついて、胸から血がほとぼしり出るのを見ると、自分の死とともにこの大宇宙が崩れ去ると考える。——崩れさせなければならぬのだ。——論理である。

しかし、それがまた、まったく話にならないほど非現実的な考えだということもわかっていく。だが、それがどうしようもない、ギリギリの実感であつたほど、私は徹底的に孤独だったのだ。

現代はとかくみんなが単一な世界に安住しがちである。科学的な秩序の世界。たとえば自分の生命とともに宇宙が崩れ去るなんて非合理的な信念にはだれも生ききれない。せいぜい一つのイメージ、ファンタジーとしておもしろがるくらいのものだ。しかし、その信念を、科学における手応えと同じように、切実に、現実を感じとらなければいけないのだ。科学的認識と、生きる意志、いわば生命の神秘的認識、直観が同在しうる。

あまりにも非合理的である。であるからこそ、またあまりにも切実な、いわば生命に直接な世

界観——徹底的に孤独な神話だ。ただのフィクションやおハナシなどのように、簡単に割り切れない、それは神話なのである。

一匹の蟻——それは一人の人間の運命を最も純粹に、コンデンスして捉えた姿だ。宇宙という無限大の可能性に対して、無限小の核を対立させて考える。この素っ裸な、小さい、孤独な存在が宇宙を葬り去るという矛盾。だがどうしても、そうでなければならぬのだ。

それは自分を甘やかすのではなくて、最も残酷に肯定することだ。自分がいっさいの原因であり、結果である。

自分を猛烈に孤独な極限として考えれば考えるほど、それによって宇宙が猛烈に彩られていく。だから逆に自分をそういう極限に追いつめることによって、己即宇宙という実感をもつことができる。

現在の私はあの当時のような悲劇的、絶望的なロマンティストではない。しかし今なお自分がこの世の中に責任をもって生きている、その覚悟でいる限り、宇宙即己という意志を変えてはいない。もし、自分の死後にも宇宙があるとしたならば、自分はそれに対して責任を負えない。それなら現在の責任も負えないし、負っていないことになるわけである。だから自分が責任を負うならば、この宇宙は自分とともに消滅し去らなければならない。

たとえ自分の能力、そのおよぶ範囲がどのようなものであろうと、可能・不可能をのりこえて、絶対的責任を感じとる。である以上、私がここを去るときには、この世界、この宇宙を、ともに消し去らなければならないし、消し去るべきだと思っているのだ。それは実感である。

過去、未来、その重みは現在にのしかかっている。だからこそ責任はすべて現在の一瞬において背負ってしまう。一匹の蟻の矛盾こそ、最も朗らかな人間的運命なのである。

だから言いたい。孤独を悲壮感で捉えるべきではない。孤独こそ人間の現実的なあり方であつて、狭い、特殊な状況ではないのだ。逆に人間全体、みんなの運命をとことんまで考えたら、人は必然的に孤独になる。孤独であるからこそ、無限の視野がひらける。

とことんまで自分をつきつめ、それに徹しければ、その窮極にカツ然と、人間全体のいわば同質的な、一体となった世界が展開するのだ。

それが人間の誇りである。

著者

目次

一匹の蟻……序にかえて

I 残酷な青春……………9

犯罪者青春論——全学連 10
若い英雄 41

II 運命愛……………57

黒い太陽 58
“かへらじと” 63
青い鳥 66
崖の家 68
おやじ 70
大人の裏切り 79
数学と頓智 81
私の読書 83

死の本能 90

ソルボンヌ時代 92

「傷ましき腕」のころ 97

わが二等兵物語 100

「憂愁」のころ 114

父の遺産 119

呪術誕生 131

四十すぎからのスキー 137

暗い鳥 140

私の健康法 144

記念日無用 148

坐ることを拒否する椅子 149

誇り 152

梵鐘を作る 158

いやな感じ 164

韓国発見 166

Ⅲ 動き、感じ、考える 173

お茶のみ方 174

心の中の公園 176

あいさつ 178

ないんですけれど 180

ネクタイ・切符追放論	181
水争い	187
ゴミのあわれ	191
はらはらさせる美しさ	192
シャツスタイル	194
秋風の庭	195
存在の強弱	197
わかること、わからぬこと	199
文化の独自性	201
美術・東と西	205
カワヤ譚	209
生存者	211
エチケツト	212
虚勢の影	214
演技・ドラマ・ドキュメント	215
夢のないやつは困る	218
うなるネオン	221
エジプト芸術の永遠	224
設計	226
女のいのち	227
たき火	229
明朗な祭り	230
集団的再生——新年	232

IV 日本発見……………235

日が生まれかわる 236

開発か保存か 237

縄文の土偶 244

はにわ 246

舞楽 247

東寺 250

甲冑 261

銀沙灘 263

出羽三山 265

武蔵野 272

石ぼとけ 274

東海道五十三次 277

神々の島 久高島 291

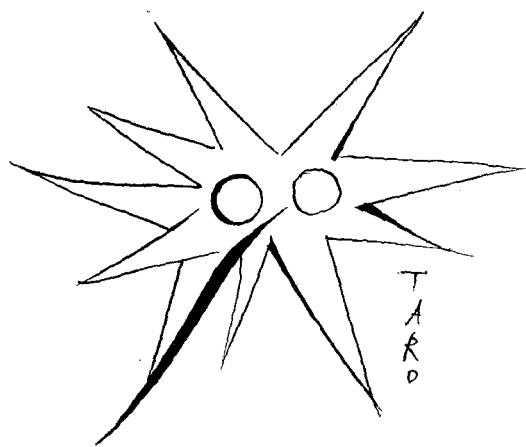
《オバケ》このアンチ人間 307

あとがき……………318

装幀・本文カット 著者

●掲載新聞・雑誌（本文中に明記したものを除く）一九六六年婦人公論八月 一九六六年
 毎日新聞十月二十三日 一九五九年『黒い太陽』美術出版社刊 一九六三年文芸春秋十二
 月 一九六五年文学座パンフレット九月 一九六〇年東京新聞六月十八日 一九六四年朝
 日ジャーナル七月十二日 一九六五年日本読書新聞十月四日 一九六二年数学セミナ
 一九五二年日本読書新聞七月二日 一九六七年文芸二月 一九五四年図書新聞十月三十日
 一九六四年西日本新聞五月十四日 一九五七年文芸春秋四月 一九六〇年朝日新聞十二月
 十八日 一九五八年文芸春秋六月 一九六四年みずゑ二月 一九六六年文芸春秋別冊 一九六
 一年婦人公論八月 一九六六年週刊文春六月二十日 一九六二年朝日新聞七月二十日 一九六五年婦人公論十
 四年朝日ジャーナル三月十五日 一九六二年朝日新聞十二月八日・九日 一九五七
 年西日本、中部日本、北海道新聞八月二十三日 一九六四年朝日新聞十二月八日・九日 一九五七
 年毎日新聞二月二十二日 一九六四年週刊読売二月九日 一九六〇年産経新聞九月八日 一九六〇
 年西日本、中部日本、北海道新聞一月二十九日 一九六〇年産経新聞八月二十五日 一九六六年女性自身十
 月二十二日 一九六三年太陽七月 一九六〇年産経新聞九月二十五日 一九五八年女性自身十
 二月二十二日 一九六五年朝日新聞十一月三日 一九六六年朝日新聞三月十七日 一九六五年P
 P十一月 一九六五年朝日新聞十一月三日 一九六六年朝日新聞三月十七日 一九六五年
 朝日新聞十月十六日 一九六四年週刊読売五月十日 一九六〇年産経新聞十月二十八日
 一九六〇年産経新聞十一月四日 一九五八年週刊朝日五月十六日の折込広告 一九五七年
 北海道、中部日本、西日本新聞二月三日 一九六三年毎日新聞四月十三日 一九六七年証
 券のある生活一月 一九六一年産経新聞一月十九日 一九六〇年毎日新聞二月八日 一九
 六四年共同通信系各紙四月二十五日 一九六六年北海道、中部日本、西日本新聞一月八日
 一九六五年読売新聞一月一日 一九六六年芸術新潮一月 一九六〇年朝日ジャーナル二月
 十四日 一九五四年婦人公論九月 一九六四年文化財保護委員会舞臺公演パンフレット
 一九六五年『東寺』東寺文化財保存会刊 一九五七年北海道、西日本新聞一月・三月 一
 九六五年山形新聞八月十三日

I
残酷な青春



犯罪者青春論——全学連

青春は猛烈な実体だ。

俗に、若気のいたり、などと、虚妄のようにかたづけたり、浮動の状態、夢としてやりすごしてしまふ。まちがっている。

それは混濁したまま、八方に通じる道だ。私はむしろ極言したい。青春こそがこの世界の肉体であり、エネルギー源である。

官僚的だったりアカデミックな、いわゆるおとなとして固まってしまった人間には、青春は甘美な思い出、または悔恨として、感傷の対象であるかもしれない。

だがなまなましく生きている人間、激しく現実におつかっている人間の心の奥には、いつでも若い情熱が瞬間々々にわき上がっているのだ。人間の内にあって、精神の若さと、肉体の若さは猛烈に交流し、侵入しあっている。そういう流動的な状況が青春なのだ。

「青春」はだからいつでも現在のである。ことわるまでもない。私のいう青春は単に世代や年齢に固着したものではないということ。現代の青春をみつめるにあたって、そのようなひろい意味の、本質的なポイントを基底におき、現実の若者像とダブらせながら、われわれの「若さ」、日

本の運命がになっている青春の意味を考えてみたい。

戦後二十年を経て、さいきん若さの喪失が目立つ。国の展開期には当然、若いエネルギーがみちあふれ、混乱し、ガムシヤラにぶつかりあって、ふくらむ。そこでは若さが誇らしくあるべきなのに、近頃、妙に頭を抑えつけられ、ひねこびている。矛盾だ。政治・経済・文化、あらゆる面で、年寄りじみた顔がその層をもち上げ、重い気分がはびこってきている。すると何となく若さが白眼視されはじめるのである。「人づくり」だの「期待される人間像」などという三味線がひかれ、嵩にかかったような若さへの不信が、おおっぴらになる。だがそれは大人たちの自信喪失でもあるのだ。

それは私にとって、ほとんど肉体的な苦痛である。青春をミナシゴにしてはならない。私自身、ミナシゴと感ずることがある。私はそれを乗りこえて、笑いはするが。

こういうご時勢に、もし若さが閉鎖的になり、自己放棄する気配が出てきたら——社会一般の墮落であり、いいような危険だ。若さをもり上げたい。それはだれでものうちにひそむ、青春のよびかけである。

そういう意味で、若さがストレートに、力として發揮されている全学連の連中とぶつかりあうことにした。意見は食いちがうかもしれない。しかし互いにぶつけあうことによって、見逃されている問題を浮きあがらせ、その底にひそむ矛盾があらわになることを期待する。お互いのために。青春の肉体は、いつでも、奪回すべきものなのだ。

若い情熱は当然、古い権威の固定した壁にぶつかる。よごされた社会を告発する。真面目であればあるほど、ゆがみに対してなれあえない。ごまかし得ない。そして多くの意志が結集したとき、革命的に世界を作り直そう、と決意する。

だが、そのように学生運動だけが独自の判断をとり、激しく行動し、イキリたてばたつほど、その度合いに応じて、おとなの世界は眼をむく。感情というよりも、物理的作用ですらある。

一九六五年九月十四日、日韓条約阻止・全国学生統一行動、第一波のデモが予定された当日は、南方洋上に二つの台風が日本をねらって北上中だった。東京でも朝から、断続的に激しく雨が吹きつける。だが日本全学連の集合同所、清水谷公園には、数百名の若者たちが集まって抗議集会をひらいていた。同じ時刻、新橋駅前の野外ステージで行なわれるはずだった自民党主催の、日韓批准推進演説会は悪天候のため中止になった。

長雨にくすんだ広場に、赤、緑、海老茶、押し立てた自治会旗は濡れそぼち、プラカードや急ごしらえの旗からは、赤インク、墨が流れしたたて、レインコートの肩、袖ににじんでいる。女子学生をまじえ、三々五々、立ったりしゃがんだり。彼らのとり巻いている中央には、活動家たちがつぎつぎと、激しい、一本調子の演説をしているのだが、声がとおらず、聞きとれない。だがみんな、気にしない顔つきだ。

ざわざわとした雰囲気。そばの記念碑の台上には、十数人も私服の刑事たちが陣どって、しきりにメモをとり、また写真を写している。口もとに笑いを浮かべながら、しかし眼つきは冷たく

鋭い。公園の外に制服の警官の層が待機している。ピチピチはね泳ぐ魚と、釣師。

やがて突然、中央部からインターの歌声がわき上がり、それが波及したと思うと、思いがけぬすばやさで隊列が組まれ、「ニッカン、ハンタイ」「ニッカン、ハンタイ」と叫びながら、いっせいに道路に向かって走り出していた。

赤坂見付から日比谷公園へ。圧倒的な機動隊にびっしり囲まれながら、彼らは激しかった。

山王下、虎の門のひろい街路、交差点を、海流のような動感でわきたち、叫び、つつ走った。受験勉強という、別途な粹でしめつけられたせいだろう、ややひ弱だが、しかし若さがムツとするような集団。ぼさぼさした髪をふり乱して、頭でっかちに見えるのもある。かなりの人数の女の子をまじえて、隊列は道幅いっぱいになる。

赤旗を何本も押し立てたデモ隊の先頭に、ぴったりとくっついて進む警察の放送車、その高い台上で警官三人がかわるがわる、威たけ高の語調で呼びかける。

「学生諸君、左側を四列になって、おとなしく歩きなさい。ジグザグや、駆けることは法律違反です。君たちがいつまでもそのような行為を続けていると、責任者は処罰されます」続いてグッと威嚇的になる。

「そのの後ろ向きになって竹ザオを押えている学生、君に警告する。直ちに正当なデモに移るよう指導しなさい。さもないと、君は公務執行妨害で逮捕されます」

執拗な呼びかけに、学生達は「ニッカン、ハンタイ」「ワッショ、ワッショ」潮のように高まる叫びで応答する。

勢揃いして待つ機動隊員は、はるかに多数だ。紺色の乱闘服、戦闘帽、プラスチックの防護面をつけ、ものものしい。携帯無線機で、「二機、三十五。三機、四十の順に前へッ。デモに對面して待機してろッ」キビキビと命令が行きわたる。比べものにならないほど訓練され統制がとれているし、えりすぐった逞しい体格だ。

学生が走る。それにびったりついて、機動隊も走る。デモ隊は時にはジグザグ、突然フランス式に展開し、またいっせいに奔流となって駆ける。それはほとんど美的である。

両側から、分厚く機動隊員が押し込んで進む。その外側、歩道には一般市民が立ち止まり、あるいは店先やビルからかけ出してきて、デモについて走っていったりする。三つの流れの層。ささやかだが象徴的な図柄になっている。

ウワァーッと異様な叫び声とともに、隊列がみだれ、ゆれ動く。デモ隊の先頭と、機動隊の黒々とした壁がぶつかったのだ。もみくちゃの、日本の青春だ。

あちこちの小ぜりあい、逮捕者が出る。機動隊のなかに引っぱり込まれ、連行されていく。五六人の制服、私服に腕をつかまれ、シャツはひきちぎられている。その姿にふと、韓国の学生のイメージが重なってくる。

青春の非力、そこに情熱の過剰が浮き上がる。街なかで、あれだけの不協和な表情をうち出すのは、正しい。あれがもし混乱であるというなら、それは貴重な混乱だ。

私には逆に、警察側の発言が、浮いて響いてならなかった。たとえば、変な例をとるが、社会の矛盾の訴えとして、当然出てくるこの混乱は、いわばわが身のハレモノだ。もちろんこれは身